

熱性けいれんの 予防法について



お母さまならびに
保護者の
皆さまへ

乳幼児期（生後6か月から4～5歳まで）には、発熱時にけいれん（熱性けいれん）を起こすことがたびたびあります。熱性けいれんが起こりやすいお子さまには、発熱時に抗けいれん薬（ジアゼパム坐剤）を使用するのがよいでしょう。この方法により、熱性けいれんを予防することが可能です。

裏面にその使用方法を記しますので、よくお読みになって、発熱時に適切に対処して下さい。

ジアゼパム坐剤の使用法

(DIAPP坐剤)

熱性けいれんは体温が急激に上昇するときに起こりやすいので、37.5℃前後の発熱に気づいたときには、できるだけ速やかにあらかじめ処方されている坐剤（ジアゼパム坐剤）を1個肛門内に深めに挿入して下さい。

そして、38℃以上の発熱が続く場合には、8時間後にもう一度だけ坐剤を挿入して下さい。2回目挿入後は、さらに発熱が持続しても、原則としてそれ以上坐剤を使用する必要はありません。ジアゼパムの効果は長時間持続します（下図）。

坐剤を使用した際には、挿入後30分間は坐剤が肛門からもれていないことを確認して下さい。坐剤が明らかにもれた場合には、新たに挿入しなおして下さい。

ジアゼパム坐剤に解熱薬坐剤を併用する場合には、30分以上間隔をあけて下さい。両坐剤を同時に使用しますと、ジアゼパムの初期の吸収が阻害される可能性があります。

一時的に多少のねむけ、ふらつきが出現したり、ときには興奮状態になることがありますが、ほかには問題となるような副作用はありません。

医師の説明をよくお聞きになって、上記の方法により熱性けいれんの予防につとめて下さい。この方法により、発熱初期の挿入のタイミングさえ失しなれば、ほとんどの場合熱性けいれんを予防できます。

なお、坐剤を使用した場合には、発熱の状況や坐剤の使用時間などをメモし、次の受診時に提出して下さい。坐剤が適切に使用されたかどうかを判断します。

(ジアゼパムの血中濃度の推移)

